
アメリカンヒーローズ

ユロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメリカンヒーローズ

【Nコード】

N6451X

【作者名】

ユロ

【あらすじ】

懐かしのTV映画や小説のヒーローたちが集まり、悪い人たちをやっつける、勧善懲悪のーてんき小説

プロローグ

自宅のリビングでニュースを見ていたその男は、政府の下した決断に狂喜乱舞した。

「やったぞ！F-35Bの開発が中止になった！当然じゃないか、普通の飛行機は、ギューンと滑走して飛び立ち、グウォーンと着陸するもんだろ？あんな、ハチドリの出来損ないみたいに飛ぶ戦闘機が、栄光あるアメリカ軍に配備されてたまるか！おい、ベッキー、ビールを持って来い！今日はサントリー・モルツにしてくれ！」

妻のベッキーは、

「なんでアメリカのビールじゃないんですか？」

「今日、日本空軍がF-35Aを採用したからだ。それに日本のビールの味は、彼らの作る半導体のように、緻密でいい味出している。」

リビングで子供のようにしゃぐ白髪頭の男。彼の名前は、ロバート・ゲーツ前国防長官。F-35Bの開発に、強行に異を唱えた男だ。

彼は、キンキンに冷えたビールを口にしながら、

「だいたい、3機種を一度に開発しようと言う所に無理があるんだ。まあ、空軍向けのA型、海軍向けのC型位なら大丈夫だろう。マクマナラの時代より、エンジンアも賢くなっているからな。だが、STOVL（短距離離陸 垂直着陸機）のB型まで一緒に開発するのは、まずい。構造が違いすぎる！案の定、開発費の高騰を招いてしまった。これでB型の開発費をA/C型に回して、全体の開発費を抑えられるだろう。」

「その説明口調のせりふ、相変わらずだな。」

その男は、リビングの隅からフツと姿を現した。

「君はいつも同じ姿だな。白のスーツと、片方がサングラスのメガネ。そして杖。若いんだか歳なんだか、サッパリ分からね。」

ゲーツは、白いスーツの男に手を差し出しながら言った。

「アークエンジェル。ようこそ、現実の世界へ。」

「CIAの仕事で、架空の経歴・架空の名前、全てが架空の世界に生きていたからな。」

2人は、硬い握手を交わした。

「CIAを引退し、のんびり酒とポロを楽しむ生活をしていたと思っただら、君からの召集だ。どうせ、ろくでもないことを考えているんだろう?」

アークエンジェルの問いにゲーツは、

「実は私も、呼び出されたクチでね。相手は、大統領だ。」

「大統領?」

「そう。大統領の指示の元、君に与える特殊部隊が任務を遂行するのだ。」

「特殊部隊?」

「おまえが指揮する部隊と言ったら?」

「エアールフは、もうないが、それに匹敵する機体があるのか?」

「バカ言え!超音速で飛べるヘリができれば、コリアートロフィー(米航空界における最高の賞)ものだ!だが、分野によっては、エアールフを超えている。」

「それは楽しみだ!」

「あと、制空権維持のために、固定翼機を付けてやろう。私が葬り去った、『最高の』機体を。」

ゲーツは、含み笑いをしてアークエンジェルを見た。

アークエンジェルは、また忙しい生活に戻るのかとため息をつき、ベッキーに声をかけた。

「奥さん!『いいちこ』と梅干とお湯ください!」

プロローグ（後書き）

>登場人物<

- ・ロバートゲーツ
- アメリカ前国防長官
- ・ベッキー・ゲーツ
- ロバート・ゲーツの妻
- ・アークエンジェル
- 元CIA特殊部隊隊長
- ・マクナマラ

ケネディ/ジョンソン政権下の国防長官。海軍機と空軍機の共用でコスト削減を試みたが、見事に失敗。

第1話

アラバマ州フォートラッカーの陸軍航空博物館に所蔵のステルス偵察攻撃ヘリコプタRAH-66コマンチと、スミソニアン博物館に移送中だったF-35Bの試作機が姿を消した！

本来なら新聞で大きく取り扱われるような大事件だったが、一流紙のトップを埋め尽くしていたのは、ヨーロッパの経済不安、それとオバマ大統領の白人疑惑だった（肌の白いオバマ大統領の幼少期の写真の発見と、高校時代に通っていた日焼けサロンの店員の証言が発端となった）。

一方、タブロイド紙の記事は相変わらずで、「エルビスとJB、マイケル・ジャクソンのゾンビが、墓場でダンス対決」だの、「パリス・ヒルトン、UFOにさらわれて人格改造受？コンビニの募金箱にブラックカードを寄付！」と、書きたい放題だった。

そんなタブロイド紙を、黒いスーツを着た男が数紙購入し、車に戻った。

車内でペラペラめくっていると、「金星人、日本の元ファーストレディの指示で、ステルスヘリ、ステルス戦闘機を強奪！」という記事に注目した。そして運転席の相棒に声をかけた。

「おい、J！この記事は怪しいな！」

「K、その記事見せてくれ。ああ、確かに怪しい。ただ金星人じゃなくて、彗星系の奴らじゃないか？やつら、派手に伸びる尻尾を隠したがっていたから、ステルス技術が有効だと考えたんだ。」

「本部のZに照会してみよう。」

Kは、Zに秘匿装置付き携帯（まだスマホ版は支給されていない）で確認を取ると、ため息をつきながら携帯を切り、Jに話し始めた。

「今回の件は、地球人の事業だ。NSAやCIA、DIAにも属さない謎の組織の事業で、仕事は我々とかち合わないそうだ。」

「それじゃあ、一安心だ。K、朝飯でも食べに行こう。」

そついうと、車は静かに動き出した。トヨタ プリウス M I B バ
ーションは、リッター100kmの超低燃費で、行きつけのダンキ
ンドーナッツへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451x/>

アメリカンヒーローズ

2011年10月20日09時13分発行